



「人工知能と人間社会」に向き合って10年

GPAI専門家支援センター長

はらやま ゆうこ
原山 優子

1. はじめに

日本ITU協会特別賞を拝受し、このように講演をする機会をいただいたことに、本当に心から感謝申し上げます。

タイトルの「人工知能と人間社会」は私自身が、10年間くらい、心に温めながら仕事としても関わってきたテーマで、今日ホットなテーマであると同時に、今後を考えた時に、また別の視点から深掘りしなければいけないテーマだと認識している。

AIが、社会そのものや技術を変革させることを可能にする技術であることは確かである。研究開発の対象としている方、業務の中でツールとして使っている方に加えて、生成AIが出てきた後は、すべての人たちがインターネットを介してAIを生活の中で使っている。これは今後どうなるか、どこまで浸透するのか、それは何を変えていくのか。AIについて深く考えることがすべての人にとって重要なことであり、同時に、技術を作る側、浸透させた人たちにとっても責任は非常に重いと認識している。

2. 私の原点

ここではAIと人間社会のテーマについてどのようなフレームで考えてきたか、今後進化するAIについてどのように見ることができるかを、個人的な視点から述べる。

50年前、フランスのブザンソン大学で数学を学んだ。フランスは数学のメッカで、中にブルバキ派というのがあり、

その枠組みで語られるトポロジーは美しくかつこいと思った。学生としてはブルバキ派と違う視点の講義も取ることが必要だったので、Information Theoryを学んだ。私にとっては「これって数学なの?」という素朴な疑問があったと同時に、フレッシュで面白いと思った。また、必修の講義でFORTRANに触れ、面白いゲームのような気がした(図1)。

40年前になると、ジュネーブ大学に籍置き教育学を勉強した。大学の歴史は古く、中でも教育学は世界的な拠点。その礎を築いたピアジェ教授は、まさに人工知能の「知能」の方を研究した人だ。人間はインテリジェンスをどのように獲得していくか、子供の発達の段階で、何をどのようなメカニズムで身につけていくかを、言語も含めた形で深掘りした。私にとってインパクトもとても大きかった。当時は今のようニューロサイエンスなどなかったので、子供たちの成長を観察し、理論化していた。

その時代同じく著名な学者でソシュール教授がジュネーブ大学にいて、彼の理論も、AIの話につながってくる。ピアジェ教授の理論では、知識の構築と同時に言語も構築されていくとされる。ではそもそも自然言語とは何か。我々が発する言葉は音声だが、その本質は背後にある意味付けの確認にある。ソシュール教授が提唱するフランス語でいうとシニフィアン (signifiant) とシニフィエ (signifié) の区別は非常に新鮮で、学生時代に学んで以来、今日AIをめぐる議論を考える上で大いに役立っている。当時は言語

学生時代の記憶を辿る



50年前
ブザンソン大学
理学部数学科
BOURBAKI School
Information Theory
FORTRAN



40年前
ジュネーブ大学
教育学部
Piaget: **Intelligence**
Saussure: Signifiant & Signifié
Chomsky: Generative Grammar



1987年
World Telecom 87
Geneva & 新宿KDDビル
テレビ電話
(INVITE64)

■ 図1



学に強い関心を持ち、世界の多様な言語がどのような構造を共有するのか、またピアジェ教授が述べるように環境の中で獲得されていくのかに注目していた。その一方で、チョムスキーの生成文法のように、普遍的な構造を前提に言語を捉える立場が主流でもあった。しかし現在の生成AIを見渡すと、当時の「普遍文法」という枠組みとは異なる新たな流れが展開しつつあると感じている。

また、ITUとの関係が個人的にあった。4年に1回の大きなイベントであるテレコムワールドが1987年にジュネーブで開催された時、私はジュネーブに住んでおり、新宿のKDDIビルにいた私の母と現地の息子と、テレコム会場から初めてテレビ電話で話をした。今では世界のどこにいても電話が通じ、画像があって当たり前だが、当時それは非常にインプレシブで、この技術は社会を変えていく、我々の生活そのものを変革させていることを、強く実感した。

30年前は、スタンフォード大学に研究生として1年行った。ビル・ゲイツが寄付して作ったコンピューターサイエンスビルディングができたばかりだった。私が研究分野として非常に興味を持ったのが、工学部の歴史とコンピューターの歴史だ。その歴史の中で、大学そのものの中で培われる研究、それから、教育内容が外部とのインターアクションの中でどう進化していくか、中でも半導体の分野にフォーカスした形で研究した。今、スタンフォードのAI研究は世界を誘導している1つであり、「ヒューマンセンター」という概念を打ち出しながら進めているが、1962年にAI Lab.ができていた。当時はコンピューターサイエンスの方が主導であって、AIはマイナーだったが、今は変わってきている（図2）。

25年前は、経済産業研究所に移った時代だ。スタンフォー

ドでの経験の影響を強く受け、シリコンバレー現象と言われたものを紐解く研究をした。また、大学の役割と産業界の役割、と同時にその中に関わる政府の役割について非常に興味を持っていた。片方があればいいという話ではなく、持ちつ持たれつの関係がある。例えば、半導体の分野においては、通常は大学で新しい技術の研究をして、それが産業界に移って製品化されるというロジックだ。だが半導体の最先端の技術に関しては、先に企業の方で革新的な技術が開発され、それが逆に問題意識として新たな理論的な枠組みを大学で作ったという流れがあった。そのように逆流もあり得るというところが非常に新鮮で面白かった。時とともに技術が進化していき、それが経済成長の原動力になっていくというのが旧来のストーリーだったが、必ずしも時が経過すれば技術が自然に動くわけではなく、その背景には投資があって、その中でも政府の役割があるというロジックが25年前あたりから色濃く出てきた。私は、その中で政府の役割は何なのかを紐解きたかった。単純に研究開発・基礎研究に投資するだけではなく、ある種のお見合いをさせる役など、政府の様々な役割に興味を持ちながら、研究を進めてきた。

15年前は東北大学に行き、仙台市・東北大学・宮城県と一緒にやったのが、「先進予防型健康社会仙台クラスター」のプロジェクトだった。ICT技術と社会システムを合体させると何ができるかというチャレンジングな取組みで、「知的クラスター」という文科省のプログラムに採択された。高齢者の方たちにデバイスを持たせてそこから出てきた情報を集約した上で、医療機関も参画し、個人の健康状態を個別に判断して、〇〇をしましょうと個別にフィードバックするシステ

研究者として歩み出してから



■図2



ムを作るという発想だった。今では当たり前サービスとしても提供されているが、15年前はそのようなシステムを作ることも、デバイス開発も大変だった。

その後OECDに出向した。そこでは「イノベーション戦略」という横断的なプロジェクトを立ち上げたばかりで、様々なイノベーションを実装するスキームを模索し、検証し、メンバー国に提言していった。製品やサービスを作って販売し、収益を上げるまでのイノベーションエコシステムが主軸であったが、私自身が力を入れたのは、ソーシャルイノベーションとかインクルーシブイノベーションという概念をいろいろな政府に提唱することだった。社会そのものを変革するための技術であり、その社会の中に住んでいる人たちのウェルフェアをも可能にする形を考え、いわゆるシステムとして埋め込むという発想だ。

私自身が政府の内側の人間になったのは、2013年。常勤で総合科学技術会議有識者議員になった。私の主たるミッションは第5期（2016年から2020年まで）の基本計画を作ることだった。様々な方と協力しながら埋め込んだのが、今でも引き継がれているSociety 5.0という考え方だ。基本的な考え方を作ったのが2015年で、まさに10年前。技術だけのロジックで社会を変えるのではなく、社会とのインターアクションの中にあって、中心的に見るべきは人であり社会であるとの考え方を促した。それを実装するために、2016年に「人工知能と人間社会に関する懇談会」というものを作った。ここでの議論は、本題である「AIと人間社会」の基盤になっている。

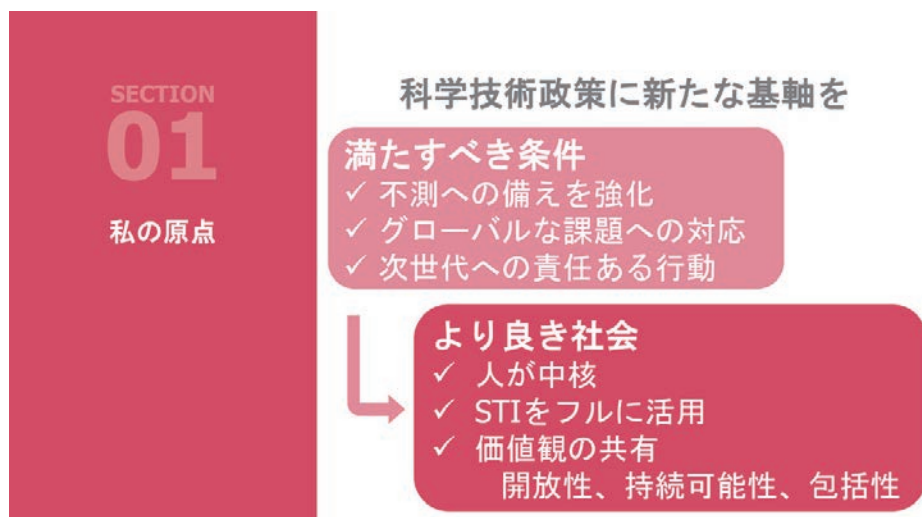
10年前を思い起こすと、その先の科学技術政策について、最初に考えたのは、この後の5年間は大変革時代になるだ

ろうという仮説。従来型の手法はあまり機能せず、発想の転換が必要になるだろうと考え、新たな基軸を盛り込むべく議論した。

満たすべき条件を確認し、それを可能にするアプローチとして我々が目指すのはより良き社会だという認識だ。科学技術やイノベーションの力をフルに使うが、やはり人が中核であろうと考えた。国として共有すべき価値観を考えた時には、開放性、持続可能性（生態系だけではなく社会的な持続可能性も含まれる）、包括性（インクルーシブ）が大事であって、これが目指すべき社会であるという発想で、第5期の基本計画を作った（図3）。

Society 5.0のエッセンスとして残したのは、技術主導から人間中心へのシフトという方向性だ。活用すべき技術の中には情報通信系のものがかなり入ってくる。当時、AIはOne of Themとしての取扱いだったが、今はAIが特出している。ビッグデータ、IoT、Quantum、Roboticsなど、様々な技術の可能性をフルに使い、これらに支えられながら、開放性・持続可能性・惑星の価値を尊重すべき社会を目指す。それは、政策担当者のみによって作るのではなく、インクルーシブなアプローチで共にデザインする社会であるべきとうたったつもりだ。

これまでも、様々な技術が社会を変えてきた。新しい技術が台頭し、社会に導入され、日々に使われるようになり、生産性や便利さが高まる。それから豊かさを感じる。また、想定外のネガティブへの対応の中で、基準、法律、ガイドラインを作ってきた。しかしAIは、非常にスピーディーに様々なことが起こり、日々新しいものが出てくるので、違う次元の発想が必要なのではないか。



■図3



3. AIと人間社会

そもそも知能とは何なのか。私のルーツではピアジェスクールに遡る。培われるインテリジェンスは、人間のみが持つ特権なのか、動物はどうか、霊長類もそうなのか。肝心なのは、どのように獲得していくのかということ。これまで観察ベースであったが、今は、AIがシミュレーションすることによって、それをチェックすることもできる。人間の知能を部分的に模擬することができて、それをうまく活用していくというところが、人工（Artificial）の部分だと思っている。要はアルゴリズムである。インプットがあり、アウトプットがある。AIについての議論で昨今特色的なのは、確率論を基盤としていることである。面白いのは、人間とAIの間で、神経回路網の模擬があって、行ったり来たりしながら両サイドで知識の構築が進んでいる点である。それから、学習という機能が盛り込まれたことにより、学習データが必要になってきた。最近Artificial AIと耳にすることがあるが、なぜArtificialを更につけるのかというと、この学習データが起点となっている。学習データそのものは自動的に集めることができるが、それをスクリーニングしなければならないし、クリーニングもしなければならない。価値あるアルゴリズムにするためには、うまく構造化することも必要だ。その作業のかなりの部分は人力によっている。人工知能と言いながら、人間がいなくてちゃんと動くようなものにはならないというところが面白いところだ。

AIが様々なシステムに埋め込まれるとどうなるか。日本が得意なもののづくりの現場でも相当AIが入っている。ある部分では自動化が可能になり、様々なレイヤーの部分でネットワーク化も可能になった。従来の一律の生産ラインでは限度があったが、かなりの部分に柔軟性を持たせることにより適用性を高めることができ、プラスの効果が相当ある。ビジネスモデルに関しても様々な新しいものが出てきている。これまでと違うのは、無形財の比重が高まってきていることで、特にデータにおいてそれはこれから続くと思う。一般の人々の生活も、これまで以上に便利になっている。今ではおしゃべりの相手にもなる。AIがある種の心地よさも与えてくれた。

では、それですべていいのか。皆さんには、人とAIの関係性、人の立ち位置はどこなのかということを考えていただきたい。これまではシステムをデザインしたり、コントロールしたりしていたのが人であった。そこにAIが入ってきて、ある種コントロールするような世界観もできつつある。これまで人間がしてきたことのIつに意思決定の部分があるが、それをすべて人間が抱え込むのか、部分的にAIの方に任せていくのか、どこまでにするのかという議論が出てきている。

2016年の5月にスタートした「人工知能と人間社会に関する懇談会」での議論を紹介する。通常、政府の懇談会では、議題に関する専門家を集め、ある程度ストーリーを

検討事項(1)

AIと人の判断のバランス
感情・信条・行動の操作の
可能性
人間観の変化
AIと協働した創作の価値の
受容・変化

倫理的論点

利用に伴う法的課題
利便性と個人情報・プライバ
シー保護の両立
AIによる創作物の権利を検討
責任概念の検討と基礎研究

法的論点

業務内容・働き方の変化に
対応する能力
企業の雇用や働き方の変化へ
の対応
経済格差解消と政策の必要性

経済的論点

■図4

検討事項(2)

AIの限界の把握
人にしかできない能力を伸張
する教育カリキュラム
従来通り行うべき教育内容
の検討

教育的論点

AIとの関わりの自由について
社会的コストの不均衡や差別
への対処
新たな社会問題(依存や過信
など)や社会的病理の検討

社会的論点

倫理観を持った行動の必要性
セキュリティ確保、プライバ
シー保護技術の開発
透明性に関する研究
社会に貢献するAIの研究開発
の促進

R&D的論点

■図5



準備した上で議論し、最終的に提言をまとめるというプロセスが取られる。しかし、この懇談会は全く違い、やってみないと分からないからまずはやってみましょうとスタートした。構成員には様々な人を集めるという前提で、必ずしもその技術の専門家、産業界の専門家だけではなく、研究者のほか、経済学、法学、哲学、ベンチャーの方など様々なステークホルダーを委員とした。さらに、懇談会だけではなく、科学未来館でイベントをしたり、ネットで意見を集めたりなど、市民の方たちの声も聞いた。この中でAIと人間社会に関する議論は、どういうフレームにすべきかという問いを出発点として、倫理的な側面、法的、経済的、社会的、研究開発というふうに、いくつかの論点に絞り込んだ上で議論した。この報告書は、2017年3月にできた。

近未来、今開発中でこれから実装されるであろうAIの技術を想定して、上記の視点から、可能になること、予想される課題のマトリックスを作り、その中から最終的に、包括的にまとめたのがこの報告書である。検討事項を図4、5に示す。

倫理的な論点の議論で浮き彫りになったのが、AIと人の判断のバランスや、人間の本質的なところの活動に関しても、影響を及ぼす可能性があるのではという話、また、AIと共同した創作の価値に関してどう向き合うのかという話だ。

法的論点に関しては、個人情報やプライバシーの話もある。経済的論点では、業務の中で働き方が変わることに対応する能力をどのように同定するのかという議論と同時に、企業の雇用形態も変わってくるだろうと。そして、派生するであろう経済格差解消のための政策についても検討した。

これは10年前の話だが、今でも論点としては、更に深掘りする必要があるものばかりだと思っている。

教育的論点もかなり面白かった。AIはどこまで進化するのかという議論をしなければいけないし、逆に言えば、人にしかできない能力を伸ばすということが重要で、それに合わせた形の教育カリキュラムが必要。通常AI人材を育てようとする、いわゆるデジタル技術を勉強させようという方向だけになってしまうが、逆に人であるが故の能力というのを強めなければいけないという視点。社会的論点に関しては、差別への対処などで、新たな社会の在り方の検討が必要だった。研究開発は倫理観をもった行動が問われるということが示されたと同時に、セキュリティの確保、プライバシーの保護に関する技術も必要だと訴えた。社会に貢献するAIは何かという補完的な研究に関しても取り上げた。これもまさに今日的な課題だ。

その後の議論については、図6にまとめる。「AI開発ガイドライン案」は総務省の中での議論だったが、2019年の「人間中心のAI社会原則」は日本政府としてのレポートである。そして日本がG7主催国だった際の群馬高崎デジタル・技術大臣会合においてはAIガバナンスの相互運用性を促進するためのアクションプランが提言され、またこれがのちのG7広島議論につながっていく。国内的にはAI戦略が2023年5月にできた。フレームに関して、日本が国際的な議論にかなり強くインパクトが出てきたというのが、このAI分野の特徴かと思っている。

最初に日本での議論があり、それをOECDに持ち込んだ形でAIに対する原則というのは2019年にできた。その後生成AIの台頭を受け、2024年に改定されている。私自身



■図6



も関わっている「Global Partnership on AI」は2020年に発足したが、ここも日本政府がかなり関与しており、またその次にUNESCOにおいては倫理という側面から勧告が出され、倫理的影響評価の方法に関しても議論している。その次には国連があって2024年にAIに関する決議が出ており、最終的に広島AIプロセス包括的政策枠組みが2023年12月に合意され、それが行動規範につながる。このように、国際的に日本はかなり貢献しており、また、継続しているというのが見てとれると思う。

法的枠組みの面では、日本にはこれまでAIに関する法律がなかった。だが、国際レベルでの欧州評議会の議論に関しては、議論に参画した上で、署名までしてきたという経緯もあり、日本の国内においても法制化が進むと考える。AI制度研究会が2024年8月に立ち上げられ、2025年2月に中間取りまとめが示され、その後閣議決定がなされ、今まさにその法制化の準備が進んでいる。

4. 進化するAI

AIは今後も更に進化することは確実だ。直近では一番ドラスティックな変化を与えたのが生成AIだ。知らず知らずのうちに、間接的にAIを使っていた状況から、今では意識的に活用する時代へと移行した。この変化はあつという間で、社会的現象になっていた。過去にこのような現象を体験した記憶はほとんどない。何が可能になったかという、質問して指示を与えると、その回答がまっとうかどうかはさておき、回答してくれる。コード不要で自然言語で話しかけることができる。そのインプットもアウトプットも、テキストだけではなく音声でもいいし、マルチモーダルなので

画像も可能。また、自立型のものがどんどん出てきている。人とAIの関係性を見ると、人間が使うAI、というより、寄り添う存在、時には依存対象へと変わりつつある。もちろん背景には巨大なコンピューティングパワーとデータがあり、データセンターや電力消費がある。遊び勝手はいいけど、その商品価値はどこにあるのか、と常に考える必要があると思う(図7)。

2025年は、AIアシスタントからAIエージェントへの転換期と位置付けられる。様々な要望に対し、これまでは我々が判断してきたが、次のフェーズとなりうるのが、AIにアクションを取るところまで任せるといったものだ。それは技術的には可能だが、どこまで進めるのか、どういう制限を付けるべきなのか、どういうフレームの中で考えるべきか。行動するAIという視点に直面する。

これまで不可能だったことが可能になってきたために生じた課題をいくつか論ずる。私たちは今、リアルにいる。それと平行して情報技術が生み出したデジタル空間がある。それを統制する際の基盤は安全性である。安全性を担保していないと、バイアスが拡張したり、データが汚染されてしまうことがある。このルールをどうするか。

次に、既存の仕事がAIに代替されるという視点。ここでは、雇用機会のみならず、働くとは何かという本質的な議論も並行して行うべきだ。この職がなくなるから困るという単純なことでは全くない。様々な過酷な労働、生産活動をAIに任せ、解放されることは有益だが、人間の行動を、AIが背景から制御することも可能になりつつある。人間の行動や判断もAIに影響され、知らず知らずのうちに誘導される、さらには監視される可能性もある。様々な情報をイン

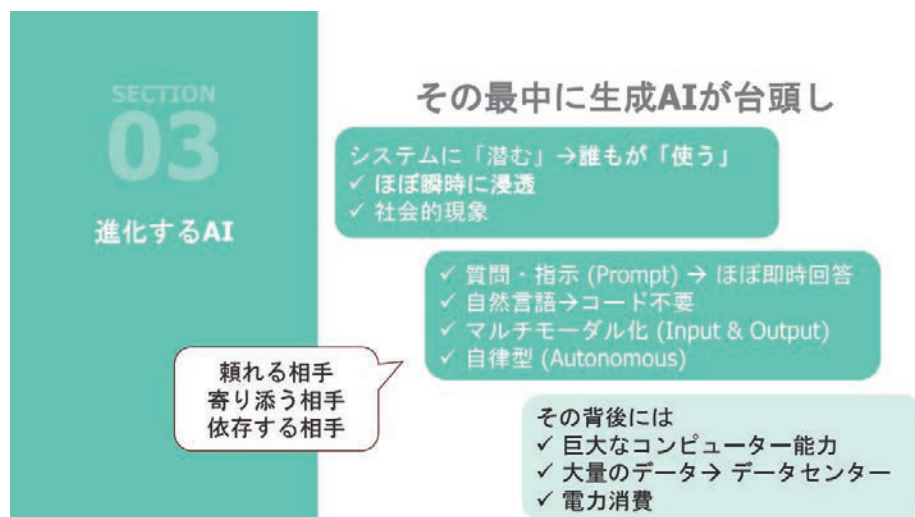


図7



プットし、AIから回答を得るということは、無意識のうちに自分自身の情報がどんどんAIに吸い取られているということでもある。このような情報の非対称性にどう向き合うかという議論が生じる。

最後はかなり現実的な話で、旧来型の兵器に対して、AIは人に破壊的なパワーを与えることもできる。そして兵器のみならず、戦時の意思決定にAIを組み込む、民生用のプロダクトを軍事用に展開するなど様々なことに可能性が広がる。AIと兵器に関しての議論は国連でも始まっているが、深刻な状況であり、今、社会的に議論しなければならない課題と考える。

人は、生まれて成長していく段階で環境やほかの人とのインターアクションによって自分を確立していき、価値観を形成していく。感性もそこで培っていくわけだが、その合間にAIが入った時に、違う形成の仕方が出てくるのではないかという仮説があり、研究もされている。AIは自己の形成、感性、エージェンシー（自主性）に大きく影響するため、年を重ねた私のような者が使う分には本質的影響は小さいかもしれない。しかし私自身、AIに誘導されている感触を持つこともあり、まだ真っ白な状態にある子供がこの環境で育ったらどうなるかは真剣に考える必要がある。どのような枠組みを作るべきか、今から議論しなければ危うい。社会の善悪判断もAIが推薦する場面が増え、これまで自分の頭で考えてきた部分が代替されると、思考を深掘りする機会が減る。出発点にいる子供たちにとって何が起きるか把握することは喫緊の課題だ。

また、これまで歴史の中で確立されてきた社会的規範すらも、AIの影響で簡単に危うい方向に変化してしまう。人権や民主主義といった社会の基盤となる社会的規範をどのように守っていくかは、AIに任せてリコmendしてもらうのではなく、人間同士が議論しながら地盤を固める必要があり、その作業をこれまで真剣に行ってこなかったことを深く反省する。

5. AIとの未来社会

人間がAIを作っているが、AIは自己増殖もでき、成長していく。AIが人間に問いかけ、ある種の挑戦を突きつけているという見方もできる。技術によるイノベーションが経済社会を大きく発展させるというこれまでの視点、それと同時に我々が真剣に考えなければならないのが、倫理的な側面であって、そして人と人との関係性だ。AIはエージェンシーを持つ可能性も技術的には不可能ではない状況に

なっており、それに対抗し、AIを使いこなしていくために必要不可欠なのは、人間のエージェンシーを確固たるものにすることである。この点を再確認し、どう強化していけるかを議論しなければならない。

先述の安全性や国家の安全保障に関しても、単純にAIの活用だけではなく、その限界、またその影響について一緒に議論をする必要があり、国際的な枠組みが必要になる。通常であれば、淡々と国際的な枠組みを使って調整を試みれば良いのだが、昨今状況は複雑になっている。技術的な革新が猛スピードで進んでいる上、地政学的不確実性がこれまで以上に高まっており、この状況がこれからもしばらく続くことが容易に想像できる。民主主義や法律順守、人権保護などが当たり前だという価値観にも揺らぎが出てきており、AIの議論の緊急性は更に高まり、また世界規模の議論が必須になっていると考える。

AI利用で考えるのは、やはり使ってどんなものか試す必要があるということだ。肝心なのはどっぷり使うのではなく、自分にあった使い方を習得すること。時折、自分にプラスの効果があるところ、危うい点などを、客観的に洗い出すことも肝心である。もう1つは、自戒も含めて、便利さに流されないということ。例えば、作文をしてる時に任せると非常に楽。言いたいことがほほうまく書かれていると、「ま、いいか」とメールを送ってしまう。このような行動が危ないと自分でも思っている。「あくまでも自分の言葉で」を心掛けたい。それからオフラインの時間を作る、オフラインの状況を想定して行動するということが大事だ。OECDのミーティングで紹介されたドキュメンタリー映画が非常に面白かった。フランスの学校の先生がスマホとの向き合い方について学習プログラムを作成し、子供たちと1年間かけて実践し、それを短編映画にまとめた。その先生は、子供たちに毎日スマホを何時間使っているかを記録させ、認識させた上で、10日間の完全オフラインのキャンプを実行した。そこで子供たちがどのように変わったかという内容だが、考えさせられるものだった（図8）。

最後に、時折、自分を客観視することの重要性を指摘する。AIがあるとエンパワーメントされている気になってしまう。「どの部分が自分なの？」と自分で意識的にチェックしないと危ない。更に言うならば、AIを使う立場として試されているのが、自分の頭で分析、判断、発想、想像する力だ。筋トレをするのと同様に頭もトレーニングをしないと衰える。自分自身で判断して行動する力、エージェンシーを鍛えることが大事で、これは特に子供たちに推奨したい。



AIのユーザーとして (個人的見解)

試してみる！

- ✓自分に合った使い方を探る
- ✓ほどほど加減をつかむ

便利さに流されない！

- ✓オフラインの状態を想定して
- ✓時折自分を客観視する！

AIと向き合う

試される分析力・判断力・
発想力・創造力

エージェンシーを鍛える

行動規範の主軸が何かを意識する

■図8

それぞれが行動規範を持っているのが当たり前だと思っているが、時折人間はぶれる。今日、人を取り巻く様々な環境が流動的であって、価値観の判断もぶれやすい状況にあるからこそ、時折立ち止まり、自分の行動規範の軸とは何かということを意識することがより重要性を持つ。意識する人たちが多ければ多いほど、集団となった社会そのものの行動も成熟したものになると考える。

未来社会は、技術も大事だがそれだけではない(図9)。何が肝心かというと、Society 5.0の人間中心という視点をこれまで以上に大切にすること。それから、科学技術イノベーションに立脚した科学的根拠を作ることの重要性を再確認したい。社会において様々な意思決定を下す際に、気分的な発言に流される、これが重要だという一主張がまかり通ってしまうことが多々ある世の中になってきた。だからこそこの点を主張したい。もう1つ、共同体としての意識をいかに育んでいくか、今、分断の中でこの点を意識した行動が求められている。これを支えているSociety 5.0をルールとして思い起こしてほしい。

今は行動の時だと思っている。誰しにも社会的責任のあ

る行動が求められており、これは未来の世代に対する責任でもあり、民主主義を守る責任でもあると思っている。まずは共同体ということ意識する、そして連帯感を再確認すること。よく危機が起こると連帯感が起こるが、通常の時でもそれを考えなければならないと思っている。核となるような社会的価値は何かということを再確認し、自分自身の私的利益と社会的利益をいかに両立させるかということも考える。「人工知能と人間社会」と書いたが、やはり核となるのは「人間っぽさ」であって、人が人であるが故、というところをもう1回再確認したいと思っている。

6. おわりに

人工知能と人間社会というテーマは、永久的に続くと私自身は思う。どうやってデザインしていくのか、皆さんのバージョンがあるであろうし、私のバージョンもある。これを共有すること、それから一緒に議論することが大事だと思う。

※本記事は、第57回世界情報社会・電気通信日のつどい記念式典での講演をリライトしたものです。(責任編集:日本ITU協会)

Society 5.0を思い起こし



人間中心
以前にも増して！



STIに支えられ
科学的根拠を活用し



開放性、持続可能性、
包括性の価値を尊重
共同体意識を
育むべく

■図9